

氏名	レオナルド ゴメス Leonardo Gomez
学位の種類	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第250号
学位授与の日付	平成16年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	Reconsidering Vernacular Japanese Architecture for Sustainable Ecological Design (日本の伝統的な建築再考—持続可能なエコデザインのために)
論文調査委員	(主査) 教授 村形明子 助教授 ハヤシ ブライアン マサル 助教授 ロバート・ファウザー

論文内容の要旨

本論文は環境学的視座に立った現代デザイン・建築論である。全体は5章から成る。

第1章では、20世紀後期の建築デザインにおけるエコロジカルな持続可能性の問題を提起する。次に、「日本の伝統的 (vernacular) 建築は、日本および各国における持続可能なエコロジカル・デザインの発展に貢献する可能性を秘めている」という、本論文の中心となる仮説が提示される。申請者は、日本の伝統的建築が近・現代の日本と西洋の建築家にとってインスピレーションの源泉となり、持続可能な建築の分野で同様の分野で同様の可能性を保ち続けている、と主張することで、この仮説を裏づける。さらに申請者は研究方法を開示して、1次資料として、視覚資料の収集、建築家へのインタビュー、建設現場の直接観察、住宅建設業界の企業訪問などをあげる。

第2章は過去50年間の環境問題の歴史を概観し、「持続可能な発展」の定義を経て、1992年のリオ地球サミット、1997年の京都議定書以後、エコロジカルな持続可能性が公論の中心テーマとなる過程を辿る。

第3章は明治初期から現在に至る日本の住宅建築の発展を通観する。申請者は、明治期の工業化、都市化、西洋化の連鎖から生じた経済的社会的変動が居住空間の大幅な再定義を招き、20世紀の新たな住宅建築の創成をもたらしたことを指摘する。また、政府が急激な都市化に伴う住宅需要の解消策として団地建設を推進した1930年代を経て、戦後復興期に展開した居住空間のnDK化、システム住宅の大量生産に注目する。高度経済成長期を通じて進行した人口の都市集中に伴う居住環境の悪化は、持続可能なエコデザインの導入を阻害するパラダイムを作り出した。

第4章はエコ製品と産業デザインの最新の潮流を分析し、流行の「環境効率」(“Eco-efficiency”)のような規定が長期的には持続可能でないことを説得的に解明する。マーケティング技術としての「環境効率」への関心がデザインの単純化と環境に優しいイメージの創出を促進しても、産業の目標は依然として消費拡大なのである。デザインにおけるエコロジカルな持続可能性増進への努力は、それがそもそも環境問題を発生させた当の産業過程に根ざしている限り、失敗に終わる。

第5章は、現代住宅建築における持続可能なエコデザインの範としての日本の伝統的建築、という仮説の主張に焦点を当てる。前半は、エコデザインと持続可能性という観点から日本の伝統的建築を概観する。申請者は、伝統的建築の素材を「廃棄物」より「要素」(nutrients)と見、大地に還る生物的養素と他の建物に使われる技術的養素に分類、大別する。伝統的建築の解体・組み立て直しの伝統は、生物的養素を技術的養素から見分ける重要性を示している。

後半、申請者は現代住宅建設産業に従事する各業種—大工、中小請負業、システム住宅産業、建築家—の現状を分析し、それぞれが持続可能なエコデザインの展開を抑制されている実情を描く。

最後に申請者は、生物分解性のあるボール紙やベニヤ板を建材に用い、日本の伝統的建築に見られる簡素で自在な空間を構築する、坂茂の仕事について報告する。坂の作品は、伝統的建築を、エコロジカルに持続可能な現代建築の創出に適用した成功例である。

しかし坂のような建築家の革新的なデザインにもかかわらず、第3章に描かれた近・現代住宅建築の大量生産・大量消費のパラダイムは、これを支える政府規制も相俟って、日本国民大多数に購入可能なデザインの供給を困難にしている。

結論で、申請者は調査結果に基づいて仮説を吟味し、伝統的建築に根ざす、持続可能なエコデザインの創成に専念すべき個々の建築家は、住宅建設業界の厳しい現実を何とか切り抜けなければならない、という課題を提起する。吟味された仮説は、日本および各国の伝統的建築の社会的進出に関するさらなる研究のための、現実的な枠組みを提供する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、環境学的視座に立った現代デザイン・建築論である。

エコロジー思想、日本建築史、産業・建築デザインにおける最新の動向に注意を払いながら、申請者は、日本の伝統的(vernacular)建築が持続可能なエコデザインの潜在的モデルになり得る、という仮説を探求する。申請者は本論文を通じて、伝統的建築の概念を拡大し、普遍的と想定される建築に対立する歴史的、または「静態的」ジャンルというより、むしろ社会的・経済的変化に伴い、進化するジャンルと見なす。この伝統的(ヴァナキュラー)建築の定義拡大は、過去の伝統的建築と同様、その時代の社会的・経済的体系の産物としての現代の伝統的(ヴァナキュラー)建築の存在を示唆する。

デザインについて、申請者は表面的構造を深部構造から区別し、いわゆるエコデザインと見えるもの、そして環境効率(“eco-efficiency”)に関する規制が必ずしも環境保全に役立たず、往々にして、そもそも環境問題を発生させた消費の悪循環を結果的に補強するマーケティング戦略にすぎないことを論証する。申請者は本論文において、エコデザインに関する誤解を解消し、日本の伝統的建築と建築における持続可能なエコデザインに関わる仮説を論じる枠組みを作るために、産業デザインを用いている。

本論文の理論的枠組みは、持続可能なエコデザインの発展における他の伝統的建築の潜在的役割の研究にも、容易に応用できよう。産業化、都市化に伴う社会的・経済的変化に関する議論は、発展途上国における伝統的建築の現在進行中の進化の研究に、特に適切であろう。世界的な展望に立って、本論文はまた、持続可能なエコデザインの創成に最も密接に関係する伝統的建築の諸相—デザインの提供する養素(nutrients)のタイプ、それらの養素に対する実際的アクセスの度合い、それらの養素の利用・再利用の過程—にも注意を向ける。申請者はまた、持続可能なエコデザインがその場所とコミュニティにデザインを統合させる美学的責任もふくむことを論じる。

本論文が将来、持続可能なエコデザインの発展における日本の伝統的建築の潜在的役割に関する我々の理解を深める上で、意義深い貢献をすることは確かである。申請者は、日本の伝統的建築の進化を、エコロジカルな展望から通時的に辿るかわりに、現代日本の社会的・経済的制約の中で、持続可能なエコデザインの理論を展開することに焦点を絞っている。持続可能なエコデザインが有効であるためには、少なくとも一部は産業化以前の伝統的建築に根ざしていなければならない、と申請者は論じる。しかし結論として、住宅建設業界の各業種の現状分析を通じて明らかにされる仮説の吟味は、持続可能な建築の発展を抑制する現実世界の困難な実情を示唆し、過去の伝統的建築へのロマンティックな回帰願望の解消に役立つ。本論文の基づいている仮説の最終的実証的吟味により、申請者は以下のことを提案している。本論題に関する将来の研究は、伝統的建築が持続可能なエコデザインに貢献する潜在性の議論において、その建築が生まれる歴史的・社会的・経済的現実の枠組みの範囲内で行うべきである。

本学位申請論文は、世界の中の日本文化環境のあり方を考える文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容をそなえたものといえる。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。